

まちづくり・ものづくり連携の視点から地域振興アドバイザーとしての報告

- 半田市産業・観光振興計画策定委員会作業部会のために -

アドバイザー 伊達美徳（都市計画家）

はじめに

昨年11月と本年2月の半田訪問をあわせてほぼまる2日間にわたって、南成岩から亀崎までの半田市の東半分の市街地を南から北へ、そして臨海部工場地帯を、自分の足で見てきました。また多くの資料と会議による情報もいただきました。少ない時間であれこれアドバイスするのも気がひけますが、それらの知見のうえで申し上げます。

わたしがアドバイザーとして訪問先の街を見るときは、まずは一見の観光客として駅に降り立って、さてこの街がわたしをどう歓迎してくれるか、自分自身の目と足で確かめることから始めます。それは地元の方に案内されて見る場合とは、おおきく異なる問題発見があるからです。

半田についても同じように、初めての日はなにも予備知識を持たないで、名鉄知多半田駅に降り立ち、駅で地図を求めました。でも、この地図が実にわかりにくいし、分りやすい駅前の案内看板は持って歩けないので、あとは長年の街歩き熟練者の勘だけで歩きました。

実は、恥ずかしながらミツカン酢の街であることもまったく知らないままでしたので、運河あたりの美しい風景や伝統的な蔵もわが足と目で発見しましたし、醜い幹線道路風景も発見したのでした。2度目は、下調べをしっかりと、じっくりと歩きました。

はじめてのものにとって、半田はあまり親切に迎えてくれる街ではありませんでした。しかし、街の真ん中に素晴らしい生活の場があり、歴史が積み重なり、観光（他に自慢すること）の資源があることを発見しました。他にも半田が誇るべきおおくのものを発見できましたが、必ずしもそれを半田の人は誇ってはいないらしい、とも思いました。

ちょっと見くらいでは半田は持っている魅力を見せてくれない、しかし、ここに暮している市民の生活は豊かなのだ、それはそれでよいのですが、これからもそれでよいのだろうか、と、気になっています。

基本的な視点について

今回の地域振興アドバイザーとして、はじめにわたしの基本的なスタンスを申し上げておきます。

この約10年間、(財)日本開発構想研究所において「MONOまちづくり研究会」を進めてきており、わたくしの今回のアドバイザーとしての訪問も、その一環として参上いたしました。

「MONOまちづくり研究会」では、日本各地で地場産業をその地域のまちづくりの中にかさねることにより地域を振興しようとする考え方について普及活動をしています。

日本各地の優秀な生産力を持つ地場産業の多くが、その製品の企画設計あるいは商品企画や販売能力を持たず、産地は単なる工場となって生産のみを受け持つ状況になり、

あるとき突然に安価生産のアジア地域に取って代わられる結果に至りつつあります。

あるいはまた、日本でも有数のある製品の産地でありながら、その産地の街では販売しない、できないという現代のいびつな流通状況のために、せっかくの地場産業が地域の活力に再生に活かされていない状況もあります。

地場産業をその地域で活かすとは、日本各地の地場産業の持つ、高い生産能力に企画力、販売力をつけて、その地域で作り地域で売り買いする街とすることです。そうすれば小売価格の半分で売っても儲かる、しかも客が買いにやって来るのです。

いまや、大量生産品ではなく、わたしだけに価値ある品物を求める時代です。そのようなお客を地域に呼び寄せるのですが、それは新しい観光であり、新しくて古いまちづくりでしょう。なぜならば、日本では焼き物（陶磁器）産地がそれをやってきているのです。焼という産地ブランド名を持って、だれだれの作というほどにもなっています。そこには大量生産品でない価値があります。

人々がそれをもとめにわざわざやってくるためには、よい産品があるだけでなく、その物をつくる場所、それを買う街にも魅力がなければなりません。そこに地場産業を活かすまちづくりが必要となるのです。

ここに新しくて古い中心街活性化策があるのです。これまで、桐生、今治、鯖江、豊岡、多治見、児島などで進めてきています。しかし、必ずしも成果があがってはいない状況で、次の展開を考えているところです。

観光と地図

観光情報の最も基本は、何がどこにあるのかという地図情報です。半田を観光して街の中を動くためにまず必要なのは、手持ちの地図、案内地図看板、そして案内標識です。いずれもはじめてみても分りやすく、便利なものでなければなりません。

わたくしが半田で手に入れた地図は下記の通りです。

いずれの地図も中途半端を免れませんが、中心部ならば、南吉ならば、全体ならばがよいほうでしょうか。のベースに国土基本図があると使い易く楽しい地図になりそうです。逆にのイラストがからめば楽しい地図になるでしょう。

テーマを絞る地図と総合的な地図と2種類が必要ですが、いずれも国土基本図（市役所にある1:2500～1:15000）を下敷きにしてスケールと市街地状況が分るようにし、その上にイラスト的な表現をして、地図から美しさと楽しさが浮き出てくるようにデザインしてもらいたいものです。

今の地図は、わたしのような初めてのものが使うには、分りにくいことが多すぎます。これは多分、地図を作るときに地元をよく知っている人だけで作っているからだろうと思うのです。しかし、地元の人にとっては地図に書くまでもない当たり前のことが、よ



半田でしか作っていない、半田でしか売っていないブランドの酢

そ者には分らないのです。地図は使う人がいっしょになってつくってこそ案内地図になるのです。

できれば、地図を見るたびに頭を切り替えなくても済むように、デザインの基本的なところは同じにしてもらいたいものです。

もうひとつの問題は、これらの地図を手に入れる方法です。駅に降りてもどこにも見当たらないので、乗車券売場窓口で地図のありかを訪ねるとおもむろに机の下から出してくれたのが（ＪＲ駅）と（名鉄駅）であり、は駅前の本屋で買い求め、は会議資料、そのほかは市役所の２階廊下まで行って入手したのです。

つまり、努力をしないことには観光地図は手に入らないのです。これでは、半田は観光にあまり力を入れていない街であると思ってしまいました。

半田の地図

表題等	範囲	目的	内容	評価（地図のみ）
都市地図・半田市 東浦・阿久比・武豊 町 昭文社発行 A 1 版	隣接町も含 わせて市全 体、中心部 拡大	一般的利用 概括的理解	町丁目と主 な道路を分 りやすく表 現し、主な観 光施設	最も基本となる地図で、総合的にわ かりやすい。 観光目的には情報不足。 大判を折るので使いにくい。
ぶらりぐるり知 多半島 A 4 版閉じこみ 発行者不明	チタン半島 全体、4 分 割、中心部 拡大	知多半島全 体の観光案 内	昭文社版の 簡略化程度	知多半島全体から見るのは便利。総 合的な観光案内としての確な表現。 市街地と田畑等の区別と地形が分 りにくいのが難。
HANDA Guide Book 半田市の産業と観 光 A 4 版閉じこみ 半田市商工観光課	市全体を 5 分割、中心 部拡大	観光施設の 案内	パターン化 した簡略地 図	どの辺りになにがあるかわかる程 度で、地元の人以外は地図としては ほとんど使えない。写真とレイアウトに凝ったつもりか。
蔵の街、半田 半田市観光協会 A 2 版	市域全体、 中心部拡大	観光案内	国土基本図 をベースに 鉄道、主要道 路、主な町 名、主な観光 スポット	地図デザインは美しくないが、国土 基本図がベースにあるので市街地 や地形が分り易い。 案内スポット番号で照合するのは 探しにくい。
HANDA CITY WALKING MAP 愛知県観光国際課 A 2 版	中心部のみ	英文による 外国人向け 観光案内	手書きイラ スト風で道 路と特定ス ポットを表 示	平板な表現で街の雰囲気伝わっ てこないし、外国人向けだからとい ってこのように絞りこんでよいの か。
半田 南吉のふ るさと 新美南吉顕彰会 A 2 版	中心部と岩 滑地区	新美南吉に 絞り込んだ 案内	新美南吉の ふるさとと しての半田 市内の関係 スポット	テーマを絞り込んだ地図として使 い易い。もう少し物語性が感じられ るとよいが、平板な表現で街の雰 囲気が伝わらないのが難。
感動ルートマッ プ半田編 発行ＪＲ A 4 版	中心部、亀 崎	歩いて観光 する案内	パターン化 した地図に 名所名店等	デフォルメしすぎて距離が分らな いし、平板な表現で街の雰囲気が伝 わらない。
はんだ蔵の街 MAP 半田市観光協会 A 2 版	中心部のみ	歩いて観光	手書きイラ スト風に名 所・名店	達者なイラストで街の雰囲気が伝 わってくるが、スケールがないので 距離感がつかめない。
JR 半田えきま え マップ 半田駅前商店街 A 4 版	J R 半田駅 前から運河 まで	商店街の店 の宣伝	デフォルメ した道路と イラストに 番号で店を 記載	初めてのものには使いにくい。店を あらかじめ知っていて訪ねるとき に使うのなら使える。スケールが ない。

駅前の市街地案内板の地図については、名鉄駅にあるものは分かり易いが、ＪＲ駅に

あるものはピクトグラムデザインはともかくとしても地図としては分りにくいし汚れて破損もしています。これらも配布地図と同じデザインにしてくれるとありがたい。

なお、わたくしが手に入れてつかった地図は、このほかに都市計画図と1：2500の図面があります。

半田市の都市計画について

はじめに、半田市のまちづくりの基本である、都市計画における利用計画についてみましょう。

都市計画の土地利用計画を見ると、現状追認型でほとんど計画性がないようにみえますし、都市計画マスタープランは、用途地域指定現況の説明に過ぎない感があります。

特に、土地利用のあいまいさを許容する準工業地域が広すぎるのは、繊維産業が盛んであった地場産業都市の特徴ですが、それが今でも地場産業育成に役立っているのでしょうか。今は特別用途地区指定の時代ですが、いかがでしょうか。

地場産業の繊維産業が衰退したいまでは、準工業地域指定が商業的土地利用立地のノーコントロールになっている可能性があります。すなわち工場跡地に大型店舗が進出してきて中心商業地を疲弊させるのですが、半田ではいかがでしょうか。

また、幹線道路の沿道部には準住居地域や近隣商業地域あるいは準工業地域指定がおおいのも気になります。自家用車による移動交通が主流となっているこの地域では、郊外大規模店舗や沿道商店群による中心部商業地との競合、そして沿道安売り店舗による景観破壊などの問題があります。現に広域幹線道路の沿道の風景は、ここが知多半島の観光地、あの新美南吉の「ごんぎつねの里」とはとても思えません。

常滑市の中部空港が開港して、その対応で拡大志向の都市計画方針ですが、それはこれからどのように表れるのでしょうか。もっとも心配なことは、新開発誘導の傾向と進行する中心部空洞化の矛盾をどう解決するのでしょうか。

都市計画施策では、今後は人口減少と超高齢社会を迎える時代に向かい、凝集型のコンパクトな生活圏に再編成しなければならないのですが、半田ではそれについてはどのような施策なのか、よく見えません。



半田市への玄関口辺りの国道 55 号の 郊外沿道立地店舗による乱雑な風景

中心街再生と知多半田駅前区画整理事業

地方都市における中心街の再生策については、この数年のあいだにいろいろな商業政策（商業近代化地域計画、コミュニティマート構想、商業集積法、中心市街地活性化基本計画等）としておこなわれてきましたが、いずれもほとんど成功していません。その原因の根本は、経済政策であり都市社会政策でなかったからです。

地域の歴史文化を背負っており、多くの市民が現に暮しており働く場もある中心市街地は、市民生活のもっとも基本となる場であるのです。ところが、中心街の活性化政策

が商業経済政策に偏してきたために、暮らしの場として環境を整えることが後回しになったのです。稼ぎの場優先で暮らしにくい場所であれば住民もいなくなるのが当然です。

その結果は、中心街地域の歴史や伝統のある文化は失われ、野放図に郊外スプロールした街は車がないと買い物どころか病院にも図書館にも学校にも行けない、高齢者や子どもには暮らしにくい街になっていったのです。

ここまでの話は日本の地方都市の一般的なことですが、半田市でも同じようです。半田市ではさいわいなことに、中心街に位置する醸造業の地場産業が盛んな状況にあり、それが中心街の魅力を維持してきました。

しかし、いくら半田市の人口が今は増えつつあるとしても、日本全体の人口減少が起きるときに、中心街も郊外開発も両立することは難しいでしょう。現に中心街は人口減少が止まらない状況です。

今、中心街では土地区画整理事業によるまちづくりが行われており、道路や下水道などの基盤施設整備が進みます。土地区画整理事業は、土地の形のコントロール段階までで、その利用の仕方に関してはコントロールしにくい事業手法です。そこで市街地再開発事業が一部に導入されており、建築物による土地利用を計画的にすすめています。

問題は、市街地再開発事業のほかの土地の上に、どのような街をつくっていくのか、ということです。今見える範囲の土地利用も都市景観も、必ずしも新しさも個性も美しさも感じません。地区計画指定がなされていますが、形態、用途規制共にあまりに緩やかすぎるので、駅前らしい個性的な景観あるいは風格ある景観を形成することはたしてできるでしょうか。

このようなまちづくりにおいて、制度的なコントロールをおこなうことについて関係権利者の抵抗があること一般的なことですが、千載一遇とも言うべき魅力ある中心市街地形成のチャンスを逃すのも、実にもったいないことです。

地区計画では、景観形成地区とあわせて、運河周辺の醸造工場地区一帯を対象に、保存型地区計画を指定されたことを高く評価します。願わくはこの次には、中心街に景観保全型地区計画が広がることを期待します。



知多半田駅前地区土地区画整理事業の区域は半田らしい個性的な風景になるのだろうか



半田の中心街に位置する醸造業は、伝統的そして現代的な生産の風景を見せている

なお保全型とは、単なる保存ではなく、街の個性的イメージを保ちながら、創造して行くことも意味するものです。

「産業・観光」計画と「産業観光」計画

これまでに半田市における産業と観光に関する計画策定は、94年「観光計画」、90年「産業振興計画」があります。今回のアドバイザー派遣対象となっている「半田市産業・観光振興計画策定委員会作業部会」における「産業・観光振興計画」は90年産業計画と94年観光計画見直し計画ととらえてよいのでしょうか。

この間の違いは、「産業」と「観光」に分かれていた計画から「産業・観光」計画となっていることでしょうか。これはたまたま産業と観光の二つの計画を同時に進めるのではなく、互いに連動するものとしてとらえるところに新たな重要な視点の展開があると考えます。

昨今の観光の視点に「産業観光」が浮上しています。それは産業の振興であると同時に観光の振興でもあるのです。産業観光は「MONOまちづくり」の重要なテーマとなっており、生産現場と生活者を観光として直接に結ぶことにより、生産者にも消費者にも新たな展開を期待するものです。現にミツカン酢の博物館や工場の風景が半田の産業観光になっています。

半田市の代表的な生産業は、伝統的な農業、知多木綿に代表される繊維、酢に代表される醸造という伝統的な地場産業と、衣浦港埋立地工業地帯に立地する近現代の工業でしょう。

農業は産業観光として成り立つ要素を持っていることは、知多牛というブランド肉に見ることができます。野菜はもちろん果物そして花卉産地でもあります。これらを伝統ある醸造製品と組み合わせ、新たな加工食品の開発をすればいかがでしょうか。付加価値の高い商品となるでしょう。そしてそれを運河周辺の産業観光と結びつけることができると、地域の産業観光資源になります。

臨海部の工業地帯には家具、自動車、鉄鋼、瓦、廃棄物、化学などの工業が立地していますが、これらも産業観光資源になるものがあります。

産業観光と道路拡幅と中心街再生の連携

半田の観光については産業化して成功しているのは、ミツカン酢による博物館「酢の里」とその周辺の伝統産業の風景が、産業観光として唯一といってよいでしょう。

生産の現場が地域の個性的な風景として息づき、ここでしか売らない買えない特別な商品もあり、長い伝統ある地場産業が産業観光として地域のまちづくりとしても生きている「MONOまちづくり」の模範的な事例です。企業文化によるメセナにさえなっています。

この模範的な産業観光に問題があるとしたら、ミツカン酢という企業エリアにとど



本町通りはお面をはずすと個性的な街並みが今も現存しているが、道路拡幅で建て直したらどんな街並みなるのだろうか

まっぴいて、半田の中心街にその活力が及んでいないことです。

これは中心街の側に、酢の里からあふれ出す観光客を受け入れる体制が今ではほとんどなされていない状況にあるからでしょうが、それでよいのでしょうか。

運河沿いの醸造工場群がつくりだす江戸時代から近現代にかけて重層する生産の風景は、地場産業が作り上げた産地らしい個性的な景観ですが、かつてはその個性的な風景が中心街の本町あたりに連なっていたと推察されます。

そしてまた醸造業ばかりでなく盛んだった繊維業や舟運に働く人たちで、本町や中町あたりにはぎわっていたでしょう。

今の運河周辺の賑わいは街とはほとんどつながりがなく、かつての繁華街の半田らしい蔵やし出し桁造りの街並みは変化して個性のないものになりつつあります。道路拡幅がそれを更に助長しています。もったいないとしか言いようがありません。

そこで今すぐにでも対応すべきことは、道路拡幅と併せた街並みの復元的保全です。もちろん昔のままの建物を建てるのではなく、土蔵造りやし出し桁造りの町屋の街並みが半田の個性ですから、内部は超現代的であっても、外観はその伝統デザインを現代に生かしたデザインで街並みを再生するのです。例としては、有田や彦根にあります。

そして醸造の街らしく、地元醸造産品を売り、地元醸造産品による味付けの地元農漁業産品の食べ物を守る（例：尾州早すし、知多牛味噌漬け、酢の物、つまり食文化を伝統街並みのなかで発信する、そのような街並みづくりを道路拡幅と一体となって行うのです。道路は道路、建物は建物とばらばらに整備しては、けっしてよいまちづくりはできません。街路事業と街並み環境整備事業を組み合わせるべきです。

現在、運河沿いの醸造工場群地区を対象にして「半田運河周辺地区計画」及び「半田運河周辺景観重点整備地区」の指定がなされて、現在の景観保全をしています。本町通りの沿道地区は、工場ではないので内容は異なりますが、伝統的イメージの街並み景観形成のために、地区計画と景観重点整備地区指定に向けた対応が必要と考えます。そこには商店街としての機能強化と共に、街なかで暮らすための居住



彦根キャスルロード商店街では、道路拡幅前は上のような街並みだったが、拡幅後に協調建て替えて下のような街並みにした



尾州早すしは酢の街半田で唯一の酢の物名物

環境の強化も盛り込む必要があります。それが中心街の再生による活性化になるはずで
す。

臨海部工業の産業観光

半田の経済を支えているのは衣浦港の臨海工業地帯に立地する産業であり、巨大な地
域を占めているが、これを産業観光にいかす方策はいかがでしょうか。

産業観光の対象となる産業は、そこで生活者の手元にわたる最終製品であること、つ
まり原材料や途中加工工程でないことが前提とされてきていますが、確かにそれが観光
行動としてわかりやすいでしょう。

しかし、半田の臨海工業地帯にある産
業は、家具と瓦は産業観光はありうると
しても、化学製品、鉄鋼製品、自動車部
品そして廃棄物処理の工程では観光とな
りえないものでしょうか。

危険な工程は見学対象にはならないと
しても、例えば、廃棄自動車の処理工程
は、地球環境保全という視点からは、社
会や学校教育の機会として、一部工程あるいはパネル展示や模型等による公開はあつて
もよいでしょう。



臨海部の工業地帯は、意外と緑が多い

工場地帯は意外に緑が多く、各企業の環境対応の努力を見ることもできるのです。こ
こを積極的に産業観光の場とすれば、企業のイメージ戦略としても有効になるでしょう
し、労働者にとっても見学者がいることで働き甲斐のある環境ともなると思うのです。

重工業を産業観光とする前例は、北九州市では行われていますので、半田でも今後検
討に値すると考えます。

「蔵のまち」「蔵と洋館の街」

半田の中心街を「蔵のまち」として売り出して
おられますが、運河周辺の醸造蔵は迫力あるの
ですが、一般の通りでは表に出る店蔵はあまりない
ので、川越（埼玉県）や栃木（栃木県）あるいは
吉井（福岡県）と比べると、どうにも迫力に欠け
るのが難点です。

半田の町屋は、表店は平入りの出し桁づくりが
軒を連ね、裏にはそれぞれ土蔵がある配置が一般
的であり、これは武生（福井県）に似ています。
武生の宝来町では街区の裏を貫通する散歩道
を作り、裏庭の蔵をこの道にむけて裏表逆転す
ことで、新しい界限を作り出しました。この方式
を半田でもどこかできる街区があるでしょうか。

半田には蔵も立派ですが洋館もあるので



JR 半田駅の陸橋とレンガ建築は、小品
ながらなかなか美しいとり合い

ら、「蔵と洋館の街」として、売り出してはいかがでしょうか。重要文化財の旧中埜家住宅、旧中埜銀行、旧カプトビール工場、中埜酢店、JR半田駅内赤レンガ建物など、ほかにもあるでしょうが多くのいわゆる洋館があるのですから、蔵と洋館をセットにしたほうがよいと思われるのです。

特に旧中埜家住宅の積極的な利用は高く評価しますが、看板類や駐車場なその周辺の景観整備はなんとかならないものでしょうか。

蔵に関しては、山車蔵（サヤ、サヤ倉）も、「蔵と洋館の街」マップの中にぜひとも入れてもらいたいものです。できることならば山車を見ることができるよう、ガラス窓もつけていただきたいものです。

これらの蔵や洋館の伝統的な半田の景観を構成している建造物類の保全策について、制度的な助成策が必要となりますが、景観条例でそれができるでしょうか。

観光と生活と風景

観光は、中国古典の易経にあり、来客に国（地域）の光（誇り）を觀せてもてなすことだそうです。その光とは、その地域がいかにより暮らしをしているか、ということであろうと、わたくしは考えるのです。

観光というと、えてして来訪する他所の人たちのための仕掛けづくり、まちづくりに偏りがちなのですが、本来的には観光のためには住民が誇るべき生活環境でなければ、あまり意味がないと思います。暮らしている住民が、毎日が保養と観光になるような気持ちよい所として、毎日の暮らしと仕事の場を誇りに思うような街でないと、当然のことながら観光客も来ないとおもいます。観光の振興策は、まずは住民たちの豊かで快適な暮らしのためのまちづくりが1番目で、他人のためのまちづくりは2番目と考えるべきだと思います。

近年、これからは定住人口が増えないから来訪する人を増やしてこれを人口に加えようという交流人口論が流行していますが、外内交流による異文化交流とともに、内内交流によるコミュニティ活性化の両論から考えるべきです。

最近では景観法もできて、景観論議が盛んです。半田市ではすでに景観条例があり、景観政策を進めています。第2次大戦後の物のない時代にはとりあえず暮らしの場さえあればよしとし、高度成長時代には増加する口に対応してたくさんの方が暮せばよしとして、まちづくりを進めてきました。今、人口減少と超高齢化時代を迎えて、質の高い快適な生活空間の



旧中埜家住宅は洋館建築として美しいが、看板類に埋没して景観としては美しい



新美南吉ゆかりの岩滑地区への国道からの入り口の交差点は看板乱立

まちづくりが求められています。まさにそこに景観づくりが位置づけられます。

ところで、では半田は景観政策が行き届いていて、他に誇ることができる美しい風景の街でしょうか。わたしが見たところでは、運河周辺の工場群が特異な状態でそれに対応しているのみで、そのほかには半田は美しい風景には程遠いといわねばなりません。風景あるいは景観とは、一連のつながりとしての状況を言うのであり、単体の建物が美しくても、美しい景観とは言いません、ちょうど旧中埜家住宅がまさにそれです。

幹線道路の沿道部の用途地域指定が商業系となっておりしかも景観コントロール策が何もないので、安売り店やファーストフードなどの極彩色建築と看板類が乱立しています。幹線道路はいわば半田の街への玄関前の道といえますが、その醜い風景はこの上もありません。客間を飾っても、玄関口は掃除をしないようなものです。

運河沿いのミツカン酢の工場周辺は、醸造の生産原風景を保っているために、じつに美しい風景です。これに対応するために河川が港湾事業でしょうが、運河に現代的な修景工事がなされています。それはそれで努力に敬意を表するのですが、デザインとしては気になるところがあります。近年、景観設計という言葉が土木系エンジニアからいわれるようになり、道路や河川の修景が行われるようになり、質的に高い空間が生まれてきていますが、中には修景とは飾りをつけることとか、形をひねくると勘違いする傾向もあります。

運河沿いの修景はあくまで醸造蔵の連なる風景が図であり、これを生かすために河の修景は地(いわば脇役)であるべきですが、河の手すりや橋のデザインに脇役を越えようとするやりすぎの感があります。また、道路と河川の施設管理者の違いでしょうか、手すりが同じところに3種類もの別の形が登場しているところもあります。

景観とは自然と人文環境の総合としての表現ですから、全体を見て修景を行う必要があります。これが景観政策における基本となる重要な視点であり、半田の観光振興政策のための視点でもあります。以上



運河修景の手すりデザインはちょっと過剰、道路際のガードレールはそのまま

附：中心街や景観については下記ホームページもご参照ください。

伊達サイト<まちもり通信> <http://homepage2.nifty.com/datey/>